

# 朱旭氏、洪洲氏 歓迎の集い

## 「映画、演劇、囲碁」 7月1日

日中文化交流協会は、7月1日、来日中の朱旭、洪洲両氏を歓迎する集いを東京・丸の内三菱ビルで開催した。この集いには役員、会員など約100名が来場した。

北京人民藝術劇院の俳優として、さらに映画やテレビで活躍している朱旭氏は、1995年、NHKと中国中央テレビの合作ドラマ「大地の子」に出演、日本人残留孤児陸一心の養父を演じた。洪洲氏は戦争に翻弄された日中の囲碁棋士の友情を描いた日中合作映画「未完の対局」(82年)の脚本を手がけたほか、長年にわたり日中文化界の囲碁交流に尽力している。ここに両氏の話の要旨を掲載する(文責・編集部)。

### 朱旭氏 (俳優)

私は1930年に遼寧省瀋陽市、当時の奉天で生まれました。翌31年の九一八事変から中学卒業の45年まで、戦争を体験しました。49年に北京の華北大学に入学、在学当時所属していた文工二団が後の中央戯劇学院の話劇団を経て、現在の北京人民藝術劇院になりました。初めて話劇を演じたのは49年の「生産長一寸」でしたから、それから



66年の演劇人生、1983年に「茶館」公演のため初来日した思い出などを振り返る朱旭氏

現在まで66年間話劇を演じています。

その間、老舎の代表作「茶館」などのほか、「ケイン号の叛乱」のクイック船長、ナチスのヒトラーを題材にした「屠夫」など海外の作品も数多く演じてきました。映画では、「變臉 この權に手をそえて」で四川川劇院の達人から門外不出の技芸を伝授されました。今でも好奇心旺盛な映画ファンから「變臉」の秘密を聞かれることがあります。



「大地の子」の一場面。病気の日本人残留孤児陸一心(左)を労わる陸徳志を演じる朱旭氏

達人との約束を守り、一度も口外したことはありません。また、愛新覚羅溥儀の生涯を描いたテレビドラマ「末代皇帝」では戦後ソ連で収容された溥儀を演じました。このドラマには杉村春子さんや千田是也さんとも親交の深い藍天野が出演しています。私が初めて話劇で共演したのが藍天野なのですが、2012年、北京人藝が創立60周年を迎えた際に記念公演「甲子園」で再度同じ舞台に立ちました。お互いにこれと冗談を言い合いました。その他にも文化大革命中の四川を舞台にした「小巷名流」など、演じた役柄を挙げれば本当にきりがありません。

日本には83年、「茶館」の公演で初めて訪れ、耳かき売りの老人を演じました。当時から感じていた日本の清潔な印象は今でもまったく変わりません。それ以来、日本との縁は深く、「大地の子」のほか、91年には現在も北京人藝で活躍している俳優濮存昕とともに「乳泉村の子」に出演し、栗原小巻さんと共演したことなど、たくさん思い出があります。

「大地の子」は戦後50年の節目にあたる1995年、NHKと中国中央テレビが共同制作したテレビドラマです。日本の中国への侵略、その戦争に巻き込まれた両国の人々を描いた作品でした。昨日、主人公の日本人残留孤児陸一心の実父を演じた仲代達矢さんと再会しました。仲代さんとはまた新しい作品で共演しようと約束し合いました。

また今日の昼には陸一心役の上川隆也さんや、当時の撮影チームの皆さんとも食事をする事ができ、懐かしい思い出を語り合う事ができました。原作者の山崎豊子さんが亡くなってしばらく経ちましたが、中日関係の大切なことが彼女の作品のなかにはつきりと描かれています。彼女は素晴らしい作家であっただけでなく、詩人でした。「大地の子」もまた詩のような響きを奏でていました。彼女が執筆活動を通じて伝えようとした思いを我々はしっかりと胸に刻まなければいけません。

私の演じた養父陸徳志が紅衛兵になぜ日本人の子供を育てるのかと批判される場面があります。後にあの場面はどんな気持ちで演じていたのかと聞かれることがよくあります。当時よく思い出していたのは、周恩来総理の「かの戦争では、中国をはじめ多くの国が軍国主義に傷つけられた。同時に、日本人民もまた軍国主義の被害者である」という言葉です。それを思うと、「大地の子」で日本人の子供を育てた養父の行動には間違いはありません。日本の軍国主義と日本人を一概に論ずることはできません。最近では中国が豊かになり、周囲を苛めるようになるのではと懸念する人もいますが、中国には「小人の心を以て、君子の腹を量る」の欲せざるところ、人に施すことなかられ」という言葉があります。このような価値観は世界のどこにいても尊重されるべきものだと思えます。南





映画「未完の対局」制作と日中囲碁交流の思い出を語る洪洲氏



作家の(左から)江崎誠致、井上光晴両氏と手談を交わす洪洲氏

アフリカ共和国の元大統領ネルソン・マンデラ氏がいい例です。彼は黒人の権利を勝ち取るために闘い、その後も決して驕ることはありませんでした。去年、残念なことに私の妻で脚本家の宋鳳儀が亡くなりました。87歳の大往生でした。最後に彼女が書いた脚本「理髪館」は、本来私が演じることを想定して書かれたものです。当時私が病気になったため、その役を演じるのができなかつたことが唯一の心残りです。生前は脚本や小説で賞もいただき、晩年には「夕陽紅中話朱旭」というエッセイも刊行しました。とても充実した人生を送ったと思います。

### 洪洲氏 (シナリオライター)

1982年に公開された日中合作映画「未完の対局」には、当初は戦争を背景にするという意図はありませんでした。ところが日本側の監督を務めた佐藤純彌さんが脚本を読み、これを単なる日中の棋士の友情物語に留めてはいけないと提案したのです。それがき

っかけでその後3年間、佐藤純彌監督、徳間康快先生らをはじめ多くの日本の皆さまの協力を得て、「未完の対局」の脚本は軍国主義を強く批判する内容のものに仕上がったのです。

脚本の見直しにあたっては、昨年100歳で逝去された呉清源名人のアドバイスも受けました。作中の日本に渡った中国人棋士阿明は、呉名人をモデルにしたものではありませんが、その人生を参考にさせていただいた部分が少なからずあつたからです。呉名人は少年期に日本人に見い出され、日本に渡り腕を磨き才能を開花させたのです。呉名人は戦時中、日本にいながら数年間祖国の国籍を失つたことをひどく嘆いておられました。「未完の対局」の後半部分を阿明の国籍をテーマに展開さ

せたことはその経歴を参考にしたものでも。もちろん、阿明は最後には悲惨な最期を遂げましたので、そこは呉名人とは関係のないシナリオになっています。

その後、呉清源名人は2度、日本文化界囲碁訪中団の名譽顧問として中国を訪れています。この訪中団は、1985年に中国の首都文芸界圍棋聯誼会(嚴文井会長)と日中文化交流協会の協議により実施したものです。当時、私が同聯誼会の秘書長として、日中文化交流協会は当時の専務理事白土吾夫氏が交渉の代表者で、現在の専務理事中野暁氏が担当していました。以来、訪中団は14年続けられました。以来、

を務められていた江崎誠致先生の求心力なくしてはこれほどの成果は為し得ませんでした。ある宴席のことですが、江崎先生が作家の井上光晴先生に次のように仰っていたのが深く印象に残り、今でも忘れられません。「私たちは中国に来て碁を打ち、酒を飲んでいますが、日本がかつて中国を侵略したことを忘れたわけではない、今後とも忘れることはない。私たちは囲碁の功德に感謝しなければならぬ」。囲碁を単なるゲームや競技としてではなく、「功德」として表現した人は私の知るかぎり江崎先生だけです。それは、江崎先生が長年反戦をテーマに作品を発表し続けていた作家であるということに理由がなくされ、フィリピンでの参加を余儀

目前にしていた江崎先生は、ずっと中

国へ行くことを躊躇していました。あの侵略戦争を考えると、中国へ行つて飛行機を降りた自分に何が語れるだろうかと苦悶していました。しかし、日中文化交流協会から囲碁交流のために訪中してほしいと誘いを受けたとき、初めて決心を固めたのです。先生は、囲碁とは時空を超え、人と人の心を繋ぐものだと語っていました。以来、先生は毎年のように中国へ行き、2001年に逝去するまで、日中囲碁交流に尽力し続けました。

日本文化界囲碁訪中団のほかに、1996年以降、日本書道界囲碁訪中団が15回も中国を訪問し、中国の文化界囲碁愛好者と深い友情を結びました。両方の訪中団を合せると延べ300名以上が中国を訪れ、訪問した都市は、北は黒龍江省、南は桂林、西は新疆ウイグル自治区など30カ所以上にも及びます。2007年に私の著書の日本語版「白と黒に遊ぶ」(田中廣悦訳、棋苑図書)が刊行された際には、書道界囲碁訪中団の団長を何度も務めた大井錦亭先生が題字を揮毫してくださいました。その作品は今でも「墨宝」としてわが家に飾ってあります。また、刊行にあたり、神林留學生奨学会の神林章夫先生をはじめ文化界、書道界囲碁訪中団の団員の皆さまが少しずつ資金提供して下さいました。大島正雄先生、大門武二先生には編集のために多大な協力をしていただきました。本当に日本

の皆さまには感謝の気持ちに堪えません。